様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｈ０１２８６

研究課題名（和文）第３言語圏留学がもたらすもの：多言語多文化社会で「生きる力」への長期的影響

研究課題名（英文）Long-Term Impacts of Studying Abroad in a Third-Language Environment: Enhancing Life Skills in a Multilingual and Multicultural World

研究代表者
佐々木　みゆき（Sasaki, Miyuki）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：６０２４１１４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、新型コロナウイルス感染症の蔓延のため海外留学ができず、オンライン留学に参加した学生の感想と留学による目標言語の技能上達との関連を分析することを目的とした。方法としては、オンライン留学後に目標言語の４技能の自己評価とL2英語のTOEICスコアと学習言語であるL3中国語のHSKスコアを加えた客観的な指標と、より内省的な記述コメント内での特徴的な語を対応分析によって抽出した。
その結果、オンライン留学は対面留学の代替物ではなく、独自の効用を有する学習体験であり、その制限内でこそ発達する言語学習方略もあり、第２言語（L2）と第３言語が複雑に影響しあう心理学習体験でもあることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、コロナ禍におけるオンライン留学の教育的および心理的意義を明らかにする点で学術的に重要である。結果は、従来の対面留学に代わるものとしてだけでなく、オンライン留学が独自の教育効果を持つことを示している。特に、制約の中で発展する新たな言語学習方略や、L2（英語）とL3（中国語）が相互に影響し合う複雑な学習体験が示唆している点で重要である。又、オンライン教育の有効性を再評価し、言語教育プログラムの設計において、「オンラインでの第３言語圏への留学」という新たな視点を提供する。さらに、コロナ禍における教育の柔軟性の重要性を社会に認識させる一助となり、オンライン学習の普及と質の向上に貢献する。

研究成果の概要（英文）：This study analyzes the relationship between the perceptions of students who participated in online study abroad programs due to the COVID-19 pandemic, which prevented them from studying abroad in person, and the improvement of their target language skills. The methodology includes self-assessments of the four language skills in the target language after the online study abroad program, combined with objective measures such as TOEIC scores for L2 English and HSK scores for L3 Chinese. Additionally, a correspondence analysis was conducted to extract characteristic words from introspective descriptive comments.
The results revealed that online study abroad is not merely a substitute for in-person study abroad but a unique learning experience with its own benefits. Specific language learning strategies developed within the constraints of online study abroad, representing a complex psychological learning experience where the second language and the third language interacted intricately.

研究分野：外国語教育

キーワード：第３言語留学　オンライン留学　多言語主義　生きる力

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

研究開始年度である2020年度は、新型コロナウィルスの世界的な蔓延のため、対象となる機関（大学）が留学制度自体をキャンセルしたため、データ収集自体ができなかった。2021年度と2022年度（最終年度）も、コロナウィルス蔓延は止まず、対象機関が対面による留学を実施しなかったため、当初予定したようなデータ収集は実現しなかったため、各年度に、以下のような代替措置を取り、翌年度に備えた。

2020年度:主に2019年度に収集した試行実験の結果をもとに、リサーチクェスチョンに答えるために最も最適なデータ収集方法を模索した。信頼性と妥当性の低い変数を削除し、最先端の研究で使われている変数を加え、本実験で使用する変数をほぼ決定した。

2021年度:2019年度に本研究と似た参与者160名から収集した留学前データの結果を使い、Bedfordshire大学のFumiyo Nakatsuhara博士に依頼して、対象となる日英中の作文能力を測定する信頼性と妥当性の高い測定尺度を開発し、実際に160名の作文得点を算出し、他のアンケート結果もオンライン化することで、留学前の３国語の作文力が、どんな個人差に最も影響を受けていたかが分析できる道筋をつけた。

2022年度(延長した2023年度も含む):2021年度に、対象大学が対面留学の代替措置として企画したオンライン留学(本研究の対象参与者とほぼ同様の参与者の２年次の9月から12月の秋学期に実施)の前後に、同大学の許可が得られた範囲内で収集したデータを使い、当初の計画とは異なる形の留学形態ではあるが、対象言語に”immersed(包まれる)”のような状態で言語を学ぶ際に、留学前後で第２言語と第3言語でどのような変化が起き、そのプロセスはどのようなものであったかを、限定的な側面のみではあるが調査・分析した。今回の研究成果としては、本研究が、初年度から最終年度まで、新型コロナウィルスのため本来の目的が十分達成できなかったため、当初の目的に最も近い、この2022-2023年度の調査と分析の結果を以下に詳述することで、代替することとする。

２．研究の目的

本研究は、新型コロナウイルス感染症の蔓延期間に海外留学ができず、オンライン留学に参加した学生の感想とオンライン留学による目標言語の技能上達との関連を分析することを目的とする。本稿ではコロナ禍における大学生の言語学習の動向や課題について検証するとともに、その制限された時期にこそ発達した言語学習方法と第２言語（L2）の英語と第３言語（L3）を同時に学ぶマルチリンガル学生の実態について分析した結果を報告する。

３．研究の方法

(1)参与者: 日本にある４年制大学の中国語･中国文化を専攻する 2020 年入学生を対象とした。対象学生は 2021 年 9 月 8 日から 12 月 23 日までの間、中国の提携大学とオンライン留学に参加した。留学先大学の教員によるオンライン授業が提供され、70 名の回答者の中から作文とアンケート回答のデータ利用を許可した 50 名分回答を本報告のデータとして利用した。

(2)調査方法：まず、オンライン留学後に、参与者に、「話す・聞く・書く・読む」の４技能が留学前に比べてどの程度向上したと思うかについて、１（全く向上していない）から 10（大変向上した）の 10 段階の数値で自己評価してもらい、その向上度の数値の説明として自由記述のアンケートを記入してもらった。これらは、オンライン学習管理システム Moodle を利用して回答してもらった。さらに、自己評価だけでなく、客観的な指標として、L2 英語の習熟度を示す得点も使用した。L2 としては、オンライン留学前に参与者が受験した TOEIC の Listening と Reading の各スコア、L3 としては、留学後に参与者が受験した HSK 中国語検定のうち、対象大学から提供された「聞く」と「「読む」のスコアを分析に使用した。

(3)分析方法:自由記述式のアンケートと自己評価･TOEIC･HSK の各数値を KHCoder(樋口, 2020) を使って抽出後、リスト・KWIC コンコーダンス・対応分析を使用してアンケート内に頻出する単語と自己評価と言語テストのスコアとの関連を分析した。

４．研究成果

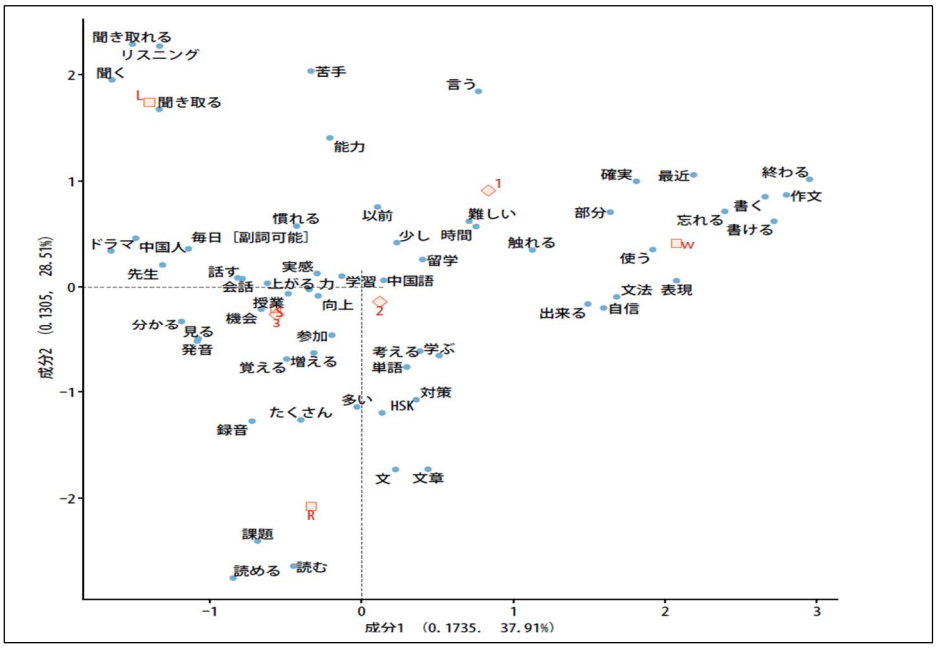
以下に本研究の主な成果を４項目示す。

(1) まず、自由記述で現れた「オンライン留学」と共起した項目を分析した。70 の回答に「オンライン留学」を含む記述が見られ、共起する語句としては、「毎日」(6)、「少し」(3)、「終わる」(4)、「経る」(3)、「参加」(3)、「学習」(4) が続いた。これはオンラインでの対話型授業で主となる、話す・聞くの音声を介する技能だけでなく、同頻度で書く・読む技能向上への回答にも見られた。即ち、現地留学でなくても一定期間に言語を集中して学ぶ機会を設けることにオンライン留学は十分にその役割を果たし、参加者もその効果を実感したという結果になる。「毎日」、「参加」、「学習」の共起語からは「オンライン留学」による普段とは異なる習慣的な学習の効果を参加学生は肯定的に見る意見が多いことを示す。

(2) 次に、４技能ごとに自由記述回答の表現に差があるのかを検証した。４技能に共通して「たくさん」(S：3，L：3，W：1，R：10)、「増える」(S：10，L：9，W：8，R：15)、「触れる」(S：5，L：3，W：11，R：3) のように言語使用の機会がオンライン留学によって増加した

ことを示す語が高頻度で見られた。「たくさん」との共起する語を階層的クラスター分析で調べた結果、前述の R:10 の数字が示すように「文章」、「読む」、「課題」といった読む技能の向上を示す語が目立つが、中には「たくさん聞く機会があり、問題なく聞き取れるようになった」と、聞く技能の向上に役立った意見もあった。

(3) 続いて、４技能と自己評価の数値とアンケート内の語との関連を分析した。図１は S・ L・W・R の各技能と自己評価についての 10 段階の数値を下位（1）・中位（2）・上位（3）に分類した後、自由記述の回答と対応分析を実施した結果である。図１が示す成分１は S・L・W・R の４技能と思われ、成分２が自己評価の下位・中位・上位であろう。S・L・W・R の周りに「話す」・「聞き取れる」・「書ける」・「読める」の語が見られるのは当然であるが、S（話す）が上位（３）と近い点にあることが興味深い。つまり、話す技能の向上を感じた学生が「機会」・「参加」・「上がる」・「見る」・「毎日」・「慣れる」・「向上」の語でその満足度を示している。「自信」・「できる」の語が高い向上度を示す軸近くにあることも注目に値する。



(4) 最後に、表１はオンライン留学体験者が４技能について向上した事を示す自己評価の数値（SE_W, S, R, L）と客観的な技能を示す数値として TOEIC スコア（EL, ER）、そして HSK スコア（CL, CR, CW）の相関係数を示す。ここで得られた結果をまとめると、L2 の英語学習でリスニングが得意な学生は、L3 の聞く・読む・書く、の技能向上に良い結果をもたらしたと言える。続いて、L3 のリスニングが向上したと自己評価（SE_L）した学生は L2 のリスニングとリーディング（EL, ER）でも良い成績を得たことが明らかになった。これは L2 でのコミュニケーションで自信をもった学生が L3 の学習でも積極的に会話を聞き、その聞く技能を向上させようと L2 学習体験を L3 学習にも活かした結果かもしれない。最後に、L3 スピーキングの自己評価が高い学生（SE_S）は L3 のリーディングテスト（CR）で芳しくないスコアであったことを示す比較的負の相関関係が示された。これは、L3 でも読む学習よりも話す・聞くという活動が好まれたためかもしれない。今回のオンライン留学ではビデオを通した対話を重視していたが、対話を好む学生には、読む技能を向上させるのには至らなかったことも示唆する結果である。

s 表 1: 4 技能の自己評価と TOEIC LR スコアと HSK LRW スコアの相関

	SE_W	SE_S	SE_R	SE_L	EL	ER	CL	CR	CW
SE_W	1								
SE_S	0.27606	1							
SE_R	0.389417	0.622579	1						
SE_L	0.286974	0.705664	0.594146	1					
EL	0.031669	0.014287	-0.07987	0.206029	1				
ER	0.029138	0.056484	0.00089	0.230983	0.410668	1			
CL	0.083678	-0.12013	-0.02208	0.081883	0.287308	-0.01656	1		
CR	0.01861	-0.29539	-0.0906	-0.0332	0.318001	0.047697	0.594836	1	
CW	0.101251	-0.12267	0.014003	0.054319	0.274506	0.018414	0.59903	0.624338	1

<引用文献>

樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して―第 2 版』ナカニシヤ出版

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　7件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 Sasaki Miyuki、Higuchi Yuki、Nakamuro Makiko、Roever Carsten、Yashima Tomoko	４．巻 9
２．論文標題 Introducing regression discontinuity design to applied linguistics	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Study Abroad Research in Second Language Acquisition and International Education	６．最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/sar.21020.sas	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Sasaki Miyuki、Suzukida Yui、Takizawa Kotaro、Saito Kazuya	４．巻 123
２．論文標題 What influences the comprehensibility of L2 writers' opinion texts by L2 readers? Interactions between textual characteristics and readers ’ profiles	５．発行年 2024年
３．雑誌名 System	６．最初と最後の頁 103352～103352
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.system.2024.103352	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Mizumoto Atsushi、Shintani Natsuko、Sasaki Miyuki、Teng Mark Feng	４．巻 3
２．論文標題 Testing the viability of ChatGPT as a companion in L2 writing accuracy assessment	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Research Methods in Applied Linguistics	６．最初と最後の頁 100116～100116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.rmal.2024.100116	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Mizumoto Atsushi	４．巻 3
２．論文標題 Data-driven Learning Meets Generative AI: Introducing the Framework of Metacognitive Resource Use	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Applied Corpus Linguistics	６．最初と最後の頁 100074～100074
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.acorp.2023.100074	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Mizumoto Atsushi、Eguchi Masaki	4．巻 2
2．論文標題 Exploring the potential of using an AI language model for automated essay scoring	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Research Methods in Applied Linguistics	6．最初と最後の頁 100050～100050
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.rmal.2023.100050	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Higuchi Yuki、Nakamuro Makiko、Roever Carsten、Sasaki Miyuki、Yashima Tomoko	4．巻 70
2．論文標題 Impact of studying abroad on language skill development: Regression discontinuity evidence from Japanese university students	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Journal of the Japanese and International Economies	6．最初と最後の頁 101284～101284
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jjie.2023.101284	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Sasaki Miyuki	4．巻 62
2．論文標題 AI tools as affordances and contradictions for EFL writers: Emic perspectives and L1 use as a resource	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Journal of Second Language Writing	6．最初と最後の頁 101068～101068
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jslw.2023.101068	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sasaki Miyuki、Mizumoto Atsushi、Matsuda Paul Kei	4．巻 0
2．論文標題 Machine translation as a form of feedback on L2 writing	5．発行年 2024年
3．雑誌名 International Review of Applied Linguistics in Language Teaching	6．最初と最後の頁 0-0
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/iral-2023-0223	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Roever, C., Higuchi, Y., Sasaki, M., Yashima, T., & Nakamuro, M.	4．巻 4
2．論文標題 Validating a test of L2 routine formulae to detect pragmatics learning in stay abroad	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Applied Pragmatics	6．最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Iwashita, N., Sasaki, M., & Stell, A., & Yucel, M.	4．巻 -
2．論文標題 Japanese stakeholders’ perceptions of IELTS writing and speaking tests and their impact on communication and achievement	5．発行年 2021年
3．雑誌名 IELTS Research Reports Online Series	6．最初と最後の頁 1-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　2件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 Miyuki Sasaki, Yui Suzukida, Kotaro Takizawa, Kazuya Saito
2．発表標題 What influences L2 readers’ comprehensibility of L2 texts? Interactions between textual characteristics and readers’ profiles
3．学会等名 American Association for Applied Linguistics Annual Conference（国際学会）
4．発表年 2024年

1．発表者名 Miyuki Sasaki
2．発表標題 Targeting under-represented Japanese EFL learners’ literacy development: A mix-methods approach
3．学会等名 American Association for Applied Linguistics（国際学会）
4．発表年 2023年

１．発表者名 Miyuki Sasaki
２．発表標題 Emergence and transferability of audience awareness in writers of L2 Japanese through web-based exchanges
３．学会等名 American Association for Applied Linguistics（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Miyuki Sasaki
２．発表標題 A non-deficit view of multilingual researchers: Transdisciplinary hopes? Inequities in journal publishing: A conversation with multilingual scholars
３．学会等名 American Association for Applied Linguistics Webinar Series（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Miyuki Sasaki
２．発表標題 Investigating L2 writing development: What lies ahead and beyond
３．学会等名 ESRC-JSLARF Symposium（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 中田達也・鈴木祐一（編）	４．発行年 2022年
２．出版社 研究社	５．総ページ数 230
３．書名 英語学習の科学	

１．著者名 Luke Plonsky他	４．発行年 2020年
２．出版社 John Benjamins	５．総ページ数 204
３．書名 Professional development in applied linguistics	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鎌倉　義士 (Kamakura Yoshihito) (80613976)	愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授 (33901)	
研究分担者	水本　篤 (Mizumoto Atsushi) (80454768)	関西大学・外国語学部・教授 (34416)	
研究分担者	秋山　友香 (Akiyama Yuka) (40825072)	東京大学・大学院工学系研究科（工学部）・講師 (12601)	削除：2022年３月31日

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関